会員だより

熊野参詣道　中辺路第二回「旧旅籠街道から先人を偲ぶ」

熊野三千六百峰と呼ばれると、参詣者や修験者には深遠さと有難さが増し、その先の熊野大社三山詣でに励みが出た事であろう。貴族、皇族や庶民に到るまで京都を出発して、この世の悩みと極楽浄土への願いを込め、数多くの王子社で禊や奉納をして、遂に紀伊田辺から東の山中に向ったのが中辺路参詣道である。他に紀伊田辺よりさらに海岸線を南に下り、串本や勝浦から北に行く大辺路、伊勢からの伊勢路などの参詣道が平安時代より盛んであった。当時蟻の熊野詣でと呼ばれたぐらいだったらしい。私達、信心は二の次にして、まずは歩く事で健康を願う現代の蟻の熊野詣でだ。

今回私達は２回目、栗栖川バス停で下車した。バスが紀伊田辺より山中に入ると川原の修復工事が目に着く。語り部に尋ねると、４年前の大災害のものと答え、さらに指さす先に山頂からの山崩れが見える。まずは準備運動をして、生活道を30分歩きの説明ながら前回立ち寄った霧の里休憩所まで結構な登り道を行く。休憩所に手作り弁当でおなじみのおばさんが自動車で弁当と味噌汁を届けて下さる。まさにその名の通り、目はり寿司、山菜ちらし、イタドリ煮付けなどの美味しい弁当でみんなやる気満々。歩きはじめると早速旅籠街道と呼ばる数軒旧旅籠名の木立札のある道を歩く。旅籠と云っても農家程度の大きさだが、古道で始めて先人の宿泊した場所に出くわした。何の不自由もない都人がひたすら歩き、ここまで辿り着いてほっとした様子が思い浮かぶ。それこそ旅籠の人達の〝おもてなし〟が嬉しかっただろう。

私達もただひたすら歩いた。村のはずれを示す庚申さんと大日如来が同居している祠→一里塚→高原池→大門王子跡→十丈王子跡→小判地蔵→悪四郎屋敷跡→上多和屋敷跡→山体月の伝説地標識分離点→大坂本王子跡→牛馬童子ふれあいパーキングと巡るなか、語り部さんは熱心にそのいわれを説明して下さる。毎回語り部さんとお別れする時、またお会いしたいと思うのは本当に熊野を愛する心が伝わってくるからだろう。今日のコースは10・５キロ、帰宅時万歩計は２万５千歩になっていた。

Ｓ・Ｕ

ＶＧ槻輪は　かくあるべし　〝サクラ（麒麟）〟のごとく

この写真は今年造幣局の通り抜けで撮ってきた桜です。横の立て看板には気高く上品とある。白く清楚で、八重咲き過ぎず存在感あり、ＶＧ槻輪のスタイル様かなと。

サクラはバラ科、原産地はヒマラヤ近郊と考えられており、現在ヨーロッパ・西シベリア・中国・米国・カナダなど主に北半球の温帯に分布している。

日本ではサクラ前線情報と共に「さくら名所百選」とか名もない花見スポットが紹介されて、日本人には古代より１番愛でられ、身近な存在である。

特に貴族に愛され、文化に花開き、武家社会では政治力にも利用された。

吉野詣でや醍醐寺の桜も最たるもの。明治時代の初めには、桜の木は封建時代の象徴とされ、各地で伐採され、多くの品種がなくなった。

その後軍国主義の高まる時代に移ると軍人とその精神の象徴として、また桜が兵舎や学校、植民地等などに植えられた。

ポトマックの桜ニュースを聞くと平和時代到来と感じる。

桜にも人間の歴史が組み込まれているものだ。

ちなみに造幣局の桜は、１８７１（明治３）年大阪造幣局が創設され、銀貨製造開始と共に局員が育てた桜が美しく育ち、１８８３年から一般公開されています。

Ｓ・Ｕ

カラー

大きな花のように見える部分はサトイモ科植物にみられる仏炎苞（ぶつえんほう）で、中にある黄色い棒状の花を保護しています。ギリシャ語で「calla」に由来すると言われている。またこの仏炎苞が、修道女の襟（カラー）やワイシャツの襟に似ていることに因むとも。原産地の南アフリカでは「豚の耳」と呼ばれているそうです。

白い色が一般的ですがピンク・黄・薄紫など増えました。私は色が多種でcolor（色）かと間違っていました。

本来水辺を好む湿地性の植物ですが、品種改良により陸地性でプランターでも良く咲いています。花期は5−6月。

花言葉は〝華麗なる美〟〝女性のしとやかさ〟

男性よ！女性にカラーの花メッセージはいかが？

金魚草　その名前の通り、花の形がまるで泳いでいる金魚のように可愛らしい花。　Ｓ・Ｕ